Take free

今治スタイル

後世に残したいもの編

imabari style
VOL.4 2019.01
天水瓶のある旧大庄屋井手家
（大西町新町）

imabari style
VOL.4 2019.01
龍神社　船上継ぎ獅子
（大西町九王）

今治スタイル

後世に残したいもの編

Take free

四国・今治
IMABARI
いまばり

つないでゆきたい

変わらずあり続けることは、
言うほど簡単なことではありません。

幾時代もの時を超え、
特別な空気をまとい、
今に伝わる数多くのもの。
それは、時代の荒波を受け止め、
前に進もうと、懸命に歩んできた証です。

今治スタイルVol.4は、
後世に残したいものをテーマに、
今治に残る歴史や伝統、
文化を探す旅に出ます。
守り、つないできた先人たちへの
畏敬の念を抱いて。

昔を知ることは、
未来を考えること。

時代をつなぐのは、
今を生きる私たちです。

今治スタイル Vol.4
CONTENTS

3 町並みをゆく
塩田があったまち　波止浜
5 椀船と月賦販売　桜井
7 高虎が込めた願い　市街地
9 神々が宿る祭りと伝統
継ぎ獅子
10 海の上に獅子が立つ　大西町 九王龍神社　船上継ぎ獅子
11 神様に笑いを届ける　朝倉 矢矧神社　獅子舞とにわか芝居
13 神様と力くらべ　大三島町 大山祇神社　御田植祭
14 東予地方で唯一の牛鬼　菊間町 加茂神社　秋季例大祭
15 伝えていきたい、郷土の味
17 実は…今治って建築がアツいんです！
丹下建築/有名建築家の作品/いまばり名建築
19 Walk in Imabari City　ディープなまちなか探検
22 イツマデモ　ノコシタイ　DESIGN
今治で見つけたお気に入りパッケージ
information

唐子浜　海の子の家と赤灯台

唐子浜の海辺には、大浜灯台吏員退息所（職員官舎）を移築した煉瓦造りの建物が佇んでいる。沖に見える赤い灯標は、明治35年（1902年）に、来島海峡で初点灯された「コノ瀬灯標」を移築したもの。その役割を終えた後も貴重な文化財を保存したいという願いから、昭和50年代に現在地に移された。

町並みをゆく

静けさのなかに流れる時間。
喧噪を離れ、懐かしい面影を感じてみてほしい。
路地を歩けば、きっと新しい発見がある。

01.波止浜　02.桜井　03.今治市街地

01.Hashihama
波止浜

八木亀三郎邸「八木商店本店」。今治市内のタオル会社のグループ会社が維持管理を行っている。

塩田があったまち

今治市の北部、狭い波止浜（はしはま）湾内にひしめく造船所群。一帯には巨大クレーンがそびえ、建造中の多くの船が並ぶ。まさに海運王国・造船のまち今治を象徴する活気に満ちたエリアだ。日中は金属音が響き、大勢の工員が行き交う、地元の人にとっては日常の光景。かつてその場所に塩田が広がり、「メイドイン今治」の塩が生産されていたことは、あまり知られていない。

龍神社の鳥居

波止浜（はしはま）の塩田は、二百七十年余りの歴史をもつ。広島の竹原塩田で技術を学んだ長谷部九兵衛により、県内最古の入浜式塩田が築かれたのは、天和三年（一六八三年）のこと。塩田完成時に、その繁栄を祈願して龍神（りゅうじん）社が建立された。神社の鳥居は、なんと、海の中にある。近年、堤防が築かれたために不思議な光景になったが、龍神様が行き来しやすいよう河口に建立されたもので、当時は遠浅が広がっていた参拝口の石段の前にあったそうだ。

この地域で製塩業が発展した理由としては、晴天の日が多く雨が少ないという気候条件と、遠浅で干潮と満潮の海水面の差が大きいという地形的条件が挙げられる。潮の干満差を利用して塩を作る入浜式塩田の方法に波止浜は最適な場所だった。

幕末まで塩田の増築は続くが、それが安定した明治以降は、塩田の地主たちは多角事業に活路を見出そうとした。その中で最もスケールが大きい人物が八木亀三郎だろう。彼はロシアへ渡り現地の商人と塩の輸送を特約。さらにサケ・マスの輸入貿易を始める。大正十三年（一九二四年）には、三千トン級の大型蟹工船「樺太丸（からふとまる）」を仕立てた。四十人が作業可能な缶詰工場を内蔵した船で、当時の技術の粋を集めたものであったという。蟹操業は活況を呈し、八木亀三郎は巨万の利益を得る。その拠点になったのが「八木商店本店」。大正七年（一九一八年）に建てられた本社兼邸宅は、近代和風建築として今もこの地に残る。裏山の庭園を含む総敷地面積は千二百七十六坪。現在は「八木商店本館資料館」として一般公開されており、予約制で見学ができる。

昭和に入り、波止浜は大規模な塩田地帯となり、全国有数の塩田産地として知られるようになった。しかし化学製塩が主流となったことで、昭和三十四年（一九五九年）、ついにその長い歴史の幕を閉じた。

塩田はなくなった。しかし波止浜は、海運・造船のまちとしてさらなる発展を遂げたのだ。江戸以来の塩田事業を通じて、資材運搬・流通のための海運や船舶関連の事業も発達していたことが、大きな推進力だった。かつて、波止浜は各地から入港する千石船（塩買船）で賑わい、「伊予の小長崎」と呼ばれる有名な港町になっていた。交易が盛んになると、船の修理や建造が必要になる。すると船大工が育ち、防波堤の工事などの港湾整備も行われるようになる。今治の海運・造船業はまさに、塩とともに発展、成長してきたといえる。

恵まれた自然条件に後押しされた塩田事業だったが、苦労の末に開拓し、発展させたのは、人の力。塩田が衰退したのちに別の道へと舵をきったのも、人の知恵と力だ。今治市が今や世界でも類を見ない海事産業（海運業・造船業・舶用工業）が集積する海事都市となったのは、今治人が時代の変化を読み取り、迅速に対応する力を持ち合せていたからに他ならない。

かつての波止浜塩田（入浜の採鹹作業）　絵葉書より

「八木商店本店資料館」として公開されている八木亀三郎邸内部

波止浜地区に残る古い雁木

波止浜港の石造灯明台。側面に
八木亀三郎の名も刻まれている。

GoogleMap

八木商店本店資料館
愛媛県今治市波止浜
2丁目406-1

現在の造船所群

桜井には今も白壁の建物が残る

02.Sakurai

桜井

今治市の東部に位置する富田、桜井地区は、古の時代、今治の中心として栄えた地。伊予の国府が置かれていたとも伝わる。古い家並みと漁師町、独特の風情が漂う桜井。国指定名勝の志島ヶ原には、菅原道真公ゆかりの史跡が残り、悠久の時を経て今に受け継がれる。

椀船と月賦販売

梅の名所、学問の神様としても知られる綱敷天満宮には、梅見や合格祈願に多くの人が訪れる。境内の片隅にひっそりと建つ「月賦販売発祥記念」の碑。現在私たちが日常的に利用している「クレジット販売」は、この今治市桜井の地から始まったことをご存知だろうか。

月賦販売の発端は、江戸時代の「けんど」作りに遡る。けんどとは、豆や雑穀などをより分けるための、ふるいのような農具で、富田の拝志地区で盛んに作られ、評判になっていた。これを船で売りに行くことを始めたのが、半農半漁の地元の人たち。紀州へ出掛けるようになったのは、材料の杉や檜を調達するためだった。寄港していた黒江(現在の和歌山県海南市)で漆器を仕入れて九州で売り、九州では唐津・伊万里の焼き物を仕入れて大阪で売る、ということを始める。なんと効率のよい行商だろう。その船はやがて「椀船(わんぶね)」と呼ばれるようになった。

軽くて持ち運びしやすい上に高価で利潤の良い漆器。売れ行きが伸びていくにつれ、商人気質の今治人が「地場で作って売ればもっと儲かるはず」と考えたのは当然の流れだろう。こうして全国の漆器の名産地から職人を呼び寄せ、桜井での漆器づくりに着手した。ピーク時の大正時代には三百人を超える職人が活躍していたそうだ。船に乗る売り子が五百人、椀船は三百隻もあり、海岸の入江には白壁に家紋の入った数十棟の漆器倉庫が立ち並んでいたという。

作った桜井漆器を各地で売る過程で生まれたのが月賦販売制度だ。先に商品を受け取り、月々分割で代金を支払う。高額な漆器を買うには便利なシステムだった。この販売で成功すると次第に漆器以外の商品にも適用されるようになり、家具や衣料などの月賦販売が行われ、のちの月賦百貨店へと変化していった。それが現在のマルイや大丸の始まりである。

月賦販売は信用取引だ。代金が回収できなくなるかもしれないリスクもあるが、陽気でおおらかな気質の今治人は、相手の心を開き信頼関係を築くのが巧かったのだろう。アイデアを駆使して商売に生かそうとする逞しさは今も昔も変わらない。桜井漆器は伝統工芸品として今治に根づいた。農具から漆器、そして商法へ、桜井の商人たちが灯した明かりは、今の時代にも静かに引き継がれている。

漁港付近の風景

漁船が並ぶ桜井の漁港

綱敷天満宮にはいくつも鳥居があり浜辺に面した鳥居もある

綱敷天満宮の梅林

綱敷天満宮境内にある蔵の扉

桜井の古い家並み

学問の神様としても有名な綱敷天満宮

GoogleMap

綱敷天満宮
愛媛県今治市
桜井6丁目2-1

03.Shigaichi
市街地

高虎が込めた願い

今治城の天守から見た市街地、今治港方面。遠くに来島海峡大橋が見える。

今治城の堀は海とつながっている

今治のシンボルとしてそびえる今治城。築城の名手といわれる藤堂高虎が一六〇二年に築城を開始した城で、堀に海水を引いた海城としても名高い。それ以前の今治の拠点は、ここから五キロメートルほど離れた唐子山の「国府城」だった。今治に着任した高虎は、その山城を廃城にし、軍事的に枢要で交通や経済発展にも便利な海沿いの平野に新しい城を築いた。

今治城は、海から砂が吹きあげる浜に建つという意で、別名「吹揚城」とも呼ばれている。平和な世と将来的な経済発展を念頭に、海に近い土地に城と町を設計したことは、高虎の先進性をよく表している。高虎は、城を中心に内堀と外堀との間に家臣の屋敷、その周囲に町人町や百姓町をつくった。江戸時代と今とでは、海岸線などは変わっているが、本町、片原町、中浜町、風早町といった町割は変わっていない。城を中心に、港と城下町をつなぐ街路を整備した都市設計が、現在の今治市の礎になっている。

商店街に「川岸端」という小さな碑がある。商店街に並行して流れる金星川は、かつて今治城の外堀だった。現在は幅六mほどの細い流れだが、江戸時代は幅三十mもあり、海から直接船を乗り入れることができたそうだ。開町当時はこの付近が川の端だったため「川岸端」と呼ばれた。のちに豪商の屋敷が軒を連ね、問屋が立ち並ぶ町の中心となっていく。現在の「今治銀座」も、この川岸端が発展したものだ。

その金星川を上っていくと「ドンドビ」に突き当たる。上流の泉川との境目で、地元の人には馴染みの場所だが、初めて「ドンドビ交差点」の標識を見た人は一様に驚くようだ。漢字では「呑吐樋」と書く。川の水を呑んだり吐いたりする装置、外堀の水位を調整するための樋門がその場所にあったことからその名がついた。堀は埋めたてられ一部が金星川となり、樋門も平成十二年に撤去された。

かつて今治城には三重の堀が巡らされていた。現存している内堀と、外堀の名残である金星川、泉川の内側に、もうひとつ中堀が存在していたそうだ。弥生通り（通称）から松本町を横断し、黄金町を海へ向かう筋が中堀だったという説がある。確かにこのルートには、ところどころ水路が存在している。当時の名残を探しながら散策するのも面白いだろう。

昭和二十年の今治空襲により八割が焼け野原となった今治市街地には、古い建物や町並みがほとんど残っていない。戦後の今治復興は県下でも早く、焼け跡から商店や家が立ち並んだという。今治人は商魂たくましくパワフル。新しいもの好きでもある。時代の変化に柔軟に対応し、自分たちの力に変えていく。そうやって幾度の苦難を乗り越えてきた。近年、客足は郊外へ流れ、中心商店街に最盛期のような賑わいはない。時代の流れ、と言ってしまえばそれまでだ。しかし今また、若い商店主や市民が立ち上がり、人の流れを取り戻そうとさまざまな取り組みが始まっている。城下町に新しい風が吹いている。

商店街と並行して流れる金星川

ドンドビ交差点・銀座商店街の入口

ドンドビ交差点の道路標識

商店の片隅に建つ「川岸端」の碑

まちなかの活性化を目指して若い人たちが頑張っている。

GoogleMap
今治城
愛媛県今治市
通町3-1-3

昭和40年代の商店街（昭和43年今治地方観光協会発行「いまばり」より）

神々が宿る祭りと伝統

継ぎ獅子

今治地方に伝わる伝統的な祭りでは、肩の上に人が乗り、縦に三～五段と継いでゆき、最上段に獅子頭をかぶった子どもが舞う「継ぎ獅子」が広く見られる。伊勢の代々神楽が江戸時代に今治地方に伝わり、天まで伸びるほどの五穀豊穣と、神の領域により近づきたいという願いから、上へ高く継いでいく「三継ぎ獅子」「四継ぎ獅子」「五継ぎ獅子」へと発展させていったといわれる。最上段で舞う獅子児は、その地区の六歳前後の子どもが務める。絶妙なバランスと力、技が頼り。その様はスリルと迫力に満ち、獅子が空に聳える気高い姿は、観る者を圧倒する。

海の上に獅子が立つ

大西町九王 龍神社　船上継ぎ獅子

船から浜に上がった獅子は、神輿を先導し芸をしながら「地蔵堂」まで練り歩き、地蔵堂であらためて演目を披露する。

愛媛県の無形民俗文化財に指定されている継ぎ獅子。今治地方には、二十以上の獅子舞団体があり、それぞれに特徴がある。神社の境内で奉納するものがほとんどだが、大西町九王の龍神社には、海の上で奉納する唯一無二の「船上継ぎ獅子」が残る。

海の中に鎮座する鳥居。かつて人々は海上から船で鳥居をくぐり龍神社へ参拝していたという。その名残で、龍神社の祭礼では、宮出しした獅子と神輿を船に乗せ、海上渡御をする。

海上の鳥居を過ぎると、提婆（だいば）という天狗による悪魔祓いの舞が披露される。その間に船を停泊させ、継ぎ獅子へとうつる。ここでは三継ぎに続き、四継ぎが披露される。強風に煽られ波間に揺れる獅子船を、海岸から固唾を呑んで見守る人々。ぐらり、と船が大きく揺れると観客から悲鳴に近い声があがった。風が止むのを待つ間も、下で支える人の体力はじわじわと奪われる。苦しそうに時折顔が歪む。観客から「がんばれ！」と大きな声援の輪が広がる。張り詰めた空気の中、天に向け獅子児がゆっくりと立ちあがると、割れんばかりの拍手が起こった。

継ぎ獅子は、子どもと大人がひとつになって厳しい練習を積み重ねてこそ披露できる努力の結晶。地上でも難しい継ぎ獅子を、不安定な船の上で成功させることは並大抵のことではない。彼らは約二ヶ月前から、毎日練習に励んできた。しかも、船上での継ぎ獅子は本番一発勝負。天候、風や波の状態は刻一刻と変わる。その緊張は計り知れないだろう。

「子どもの頃に聞いていた太鼓のリズムがずっと耳に残っています。大人になって今治を離れていた時期が長かったのですが、地元に帰った時、また継ぎ獅子をやりたいと思った。自分がそうであったように、子どもたちにも将来そう思ってもらえたら嬉しい。」そう語る九王獅子連のひとり、杉原（すぎはら）健一（けんいち）さんは、祖父も父も叔父も、船上継ぎ獅子を奉納してきた。今年は息子、綾斗（あやと）くんが見事に獅子児を演じた。近年は親子で共演することも多いという。子どもたちがとても楽しそうにしている姿が印象的だった。

下に敷いてあるのはむしろ一枚、落ちたら当然大怪我をする。継ぎ獅子を立てるときは必ず周囲に大人たちが寄せて立ち、万一崩れたら、真っ先に子どもを全員で受けにいく。「獅子児」は、未来を担う地域の宝。継ぎ獅子は、この宝を大人たちが団結して支え、守っていくという姿をあらわす。団結力と信頼関係がなければ決して成り立たない。

この地域に継ぎ獅子があるかぎり、未来はきっと明るい。

『身代わり地蔵』の一場面。地蔵づくりが間に合わず自らが地蔵のふりをした石屋は、お参りに来た人々に散々な目に遭わされる。

神様に笑いを届ける。

朝倉 矢矧（やはぎ）神社　獅子舞とにわか芝居

里山に軽やかな太鼓の音が響く。境内の片隅では男性陣がメイクに奮闘中。あまりの出来栄えに、お互い顔を見合わせて噴き出す場面も。神社は朝から和やかな笑いで包まれていた。今治市朝倉の矢矧（やはぎ）神社の春の大祭には、「にわか」と呼ばれる珍しい芝居が伝わっている。

「にわか」は、掛け合いによる滑稽な寸劇。江戸時代、大阪住吉神社の夏祭りの行列で行われた即興劇が起源とされ、明確な資料は残っていないが、当地域では二百年近い歴史があると伝わる。愛媛県内に残存する唯一のにわか芸「朝倉矢矧神社の獅子舞とにわか」は県の無形民俗文化財に指定されている。

獅子舞奉納の途中に上演されるもので、太鼓の音を合図に、役者は獅子の中から登場し、芝居が終わると獅子が迎えにやってきて、その中に消え退場していく。獅子舞の油単（ゆたん）（胴体を覆う布）が、幕代わりというのはなんとも粋。

平成三十年の祭りでは『医者と坊主』と『身代わり地蔵』のふたつの演目が披露された。いずれも十分ほどの長さで、登場人物は二～三人。拝殿の前に敷いたむしろの上で上演される。昔は十題ほどが語り継がれていたが、近年は、『白井権八』『医者と坊主』『身代わり地蔵』の中から選んで演じることが多いそうだ。時事ネタや風刺を織り交ぜたセリフが大人たちの笑いのツボをくすぐる。最前列には子どもたちが陣取り、役者に向かってかわいい野次を飛ばす。それに応酬する役者。観客との掛け合いは絶妙だ。夢中になりすぎた子どもたちが芝居に加勢するというハプニングがさらに笑いを誘う。まるで観客も役者のよう。その場にいる全員がひとつの舞台をつくっているように見えた。

矢矧獅子保存会 青年部のメンバーはこの日に向けて稽古を重ねてきた。とはいえ、「あまり練習しすぎないようにしている」のがポイントだそう。上手くなりすぎると、にわか本来の持ち味である即興の面白さがなくなってしまうというのがその理由だ。話の流れとオチは覚えているが、細かな部分は本番の流れに任せる。台本にない展開を楽しむのが、にわかの醍醐味だ。

二十代から四十代まで二十五名ほどで構成されている青年部。彼らの仕事は会社員から自営業、農業など様々。地元出身者もいれば、結婚を機に朝倉に住み始めた人もいる。共通点は、この伝統ある祭りを継承していこうと真剣に取り組んでいること。高齢化がすすむ地域の農村において若者は貴重な人材。そんな彼らを、保存会会長の菅忠則（すがただのり）さんを中心としたベテラン勢が支える。練習にも積極的に顔を出し、熱心に後輩たちの指導にあたっている。春の大祭は、世代を越え地域がひとつになって作り上げる晴れの舞台なのだ。

「にわか」の漢字は、即興的な意をもつ「俄か」が一般的であるようだが、神社由緒には「場華（にわか）」という字が当てられている。まさに場を華やかに彩る伝統芸。神様におもてなしをしたい。神様に笑ってもらいたい。そんな願いから始まったとされるにわか芝居は、時代を越え人々をつなぎ、皆に笑顔を届ける。澄み切った五月の空に笑い声がこだまする。神様も笑ってくれているだろう。

手作りの小道具や衣装なども自分たちで用意する。

『医者と坊主』時計を奪い合う場面では、観客の子どもたちが参戦してしまう予想外のハプニングが。仲裁に入る祭りの役員さん。その様子がさらに笑いを誘う。

芝居のメイクは自分たちで。

祭りは、『拝み出し』『獅子三番叟』『提婆』『寝獅子』『猩々』と続く。にわか芝居をはさんで『継ぎ獅子』が奉納される。今年は三継が二度奉納された。

獅子の動きを若手に指導する保存会会長の菅忠則さん（中央）夜遅くまで練習は続く。

神様と力くらべ。

目には見えない稲の精霊とすもうをとる一力山。「すもう」は一般的には「相撲」の字を当てるが、ここでは、相撲を含めた広義の力くらべである「角力」の文字を用い、一般の相撲とは違うこと、神との力くらべを表すとされる。

大三島 大山祇神社 御田植祭

【ひとりずもう】自分独りで気負いこんで事を行うこと。また、それが徒労に終わるたとえ――その語源になったといわれる、一人で行う相撲がある。神の島といわれる大三島、大山祇神社の御田植祭だ。

旧暦五月五日に開催される大祭では、力士「一力山」が目には見えない稲の精霊と相撲をとる「一人角力」が奉納される。稲の精霊が勝つことによって、春には豊作が約束され、秋には収穫を感謝するという神事である。江戸時代より島内の屈強な男子が力士として奉仕してきた。昭和五十九年に途切れたが、平成十一年瀬戸内しまなみ海道開通を契機に、地元の若者の中から選ばれた力士役、行司役のふたりによって一人角力は復活した。

角力は、「稲の精霊」と「一力山」による三本勝負で行われ、稲の精霊が二勝一敗で勝つのが決まり。結果がわかっているとはいえ、観客を魅了させる技の数々は見どころ十分。手に汗握る取り組みに大きな歓声があがる。最後に一力山は見えない精霊によって華麗に投げ飛ばされる。土俵を去る一力山には惜しみない拍手が送られた。

一人角力奉納のあとは、島内から選ばれた十六名の早乙女が白衣に赤襷、手甲、脚絆の清廉な装いで御田植えをする。早乙女は小学生の女児。田んぼに入る機会などあまりないであろう現代っ子、泥に足元をとられながら、おそるおそる歩く姿が微笑ましい。観客には少女たちの家族も多く、愛娘の晴れ姿を懸命に写真や動画に収めようとする様子があちこちで見られた。祭りは、厳かな神事であると同時に、家族が集まる機会でもあり、地域の人々を楽しませ、その心を和ませるものなのだとあらためて思う。

宮出し。今年はあいにくの天候だったが、珍しい雨支度の神輿に、多くの愛好者たちのカメラが向けられていた

早乙女による田植えの儀式

菊間町 加茂神社 秋季例大祭

祭り用の美しい装飾具をつけた馬に「乗り子」と呼ばれる少年が乗り、勇ましい掛け声とともに参道の馬場を一気に駆け抜ける「お供馬の走り込み」。勇壮華麗なことで知られる加茂神社秋季例大祭（菊間祭り）は、毎年多くの見物客で賑わう。そのお供馬とならぶ祭りの見どころのひとつに、「牛鬼」がある。

加茂神社の参道をすすむ牛鬼とだんじり

「牛鬼」といえば愛媛県宇和島市や南予地方の祭りが有名だが、遠く離れた東予地方で菊間町だけに現存する。その由緒や沿革、なぜ飛び地のように菊間町にあるのかは定かではない。しかし文化十三年（八一六年）加茂神社社記に牛鬼の記述があることから、江戸時代にはすでに存在していたようだ。

祭り当日は、朝九時にラッパの音を合図に牛鬼とだんじりが厳島神社を出発、加茂神社まで半鐘を鳴らしながら練り歩く。その後ろに小ぶりな牛鬼。こちらは子どもたちが担いでいる。一時間ほどかけて加茂神社に到着すると、お供馬の走り込みを一旦中断する形で、牛鬼がその長い首を伸ばしたり縮めたりしながら参道を進み、本殿への石段を上がっていく。牛鬼は場を清める役割を担っているとされており、神輿の先駆け、露払いの役を果たしている。長さ八メートルもある牛鬼が何十人もの担ぎ手に囲まれて進む姿は勇ましく、迫力に満ちていた。

牛鬼は町内にある厳島神社の氏子に託されている。牛鬼をよく見ると、ひょうきんで愛らしい顔をしており、鬼というより牛の面。牛鬼は氏子たちによる手作りなのだ。かしらの骨組みになっているのは、なんと「じょうれん」（竹で編んだ箕）。大きさや形が丁度良かったのか、昔からこれを使っているそうだ。

南予地方から遠く離れた菊間の地にぽつんと残る牛鬼。その謎に満ちた存在には、伝統を守り後世へつないでいこうとする地元の人々の惜しみない愛情と情熱が宿っている。

祭りの1週間前に牛鬼を組み立てる。骨組みは竹。しっかりと組まれた胴体の上を黒い布で覆う。

お供馬の走り込み
（愛媛県無形民俗文化財）

かしらは内側に厳島神社の御札を張り付けて作っている。どこかユーモラスな表情。

伝えていきたい、郷土の味

今治に住む人にとってはあまりに日常的すぎるため、「これが郷土料理ですよ」といわれてもピンとこないかもしれない。故郷を離れてみて初めて「アレ？これって他の地域では一般的じゃなかったの？」と気づくことが多いもの。郷土料理は、地域振興ありきのご当地グルメとはちょっとちがう。その土地に住む人が昔から食べ続けている、飾らない、ホッとできる味。

ふだん着のゴハン 家庭料理

鯛めし

今治といえば、魚の王様「鯛」。その新鮮な鯛を丸ごと一匹、お米と一緒に炊き込む「鯛めし」。塩、醤油、昆布などで薄く味付けして、炊き上がったら鯛の身をほぐし、あつあつご飯に混ぜ合わせて食べる。鯛のうま味がしっかりしみ込んだ贅沢な一品だ。

いぎす豆腐

今治では代表的な夏の味覚のひとつ。「いぎす」は、瀬戸内沿岸で採れるテングサに似た海藻の一種で、それを煮て、生大豆粉を加え、寒天のように固めたものを「いぎす豆腐」という。中にいれる具材は、エビや人参、枝豆、ひじきなど各家庭によって様々。お好みで、生姜醤油や酢味噌などをつけていただく。

せんざんき

下味をつけた鶏の唐揚げ。その不思議な名前には、鳥肉を小さく切るので「千斬切」という説や、江戸時代、千さんという人が近見山に生息していたキジ肉を使ったという「千さんキジ」説、中国語の軟炸鶏(エンザーチ)、「清炸鶏(チンザーチ)」という鶏の唐揚げの読み方からきているという説、など諸説ある。ニンニクや生姜の風味が後を引くウマさは大人にも子どもにも大人気。

煮付け（煮魚）

来島海峡の魚介類は、身が引き締まり抜群の味。煮付け、アラ焚きなどさまざまな魚料理が食卓を彩る。

ハレの日のゴハン お御馳走

法楽焼

来島水軍が戦勝の際に食べたとされる豪快な水軍料理。こうら（素焼きのほうろく）の上に小石を敷きつめ、鯛を中心に、海老、ほご、ちぬ、蛤や卵を盛り合わせ、もう一枚のこうらでふたをして焼く。味付けは塩のみ。小石が余分な水分を吸収するので、焼き上がりはホクホク。

お造り

来島海峡の激しい潮にもまれることで身の締まった美味しい魚が育つ。今治の御馳走には、刺身の盛り合わせ、豪華な舟盛りが登場することもしばしば。

鯛の浜焼き

塩で味をつけた鯛を炭火で時間をかけてじっくりと焼き上げる。お正月やお食い初めや御祝いの席でふるまわれることが多い。鯛の上品で濃厚な味を堪能することができる。

★料理協力（せんざんき／鯛めし／煮付け／法楽焼／活造り）　伊豫水軍（愛媛県今治市湊町）

Recipe

MOGUMOGU IMABARI

せんざんき（3人前）

鶏骨つき肉　400g
つけ汁
　醤油　大さじ4
　みりん　大さじ3
　酒　大さじ2
　砂糖　大さじ1
　すりおろしにんにく　お好みの量
　しょうが　お好みの量
片栗粉　適量
揚げ油　適量

1 鶏肉を大きめのぶつ切りにする。
2 つけ汁に漬け込む。（少し長めに漬けるとよくしみる。）
3 揚げる前に片栗粉を入れてよくまぜて油で揚げる。二度揚げするとカラッと揚がる。

●ご家庭ではお子様向けに骨なしの鶏肉もおすすめ。

いぎす豆腐（4人前）

いぎす草　30g
醤油　30cc
砂糖　少々
生大豆粉　100g
水　1～1.2ℓ
えび　200g
人参　100g

1 えびをゆでる。（ゆで汁をだし汁として使う）
2 鍋に定量のだし汁を入れて、いぎす草が溶けるまで炊く。
3 えびは殻をむき、人参は千切りにする。
4 （2）の中にえび、人参を入れて大豆粉を少しずつ入れてかき混ぜる。
5 醤油、砂糖を入れて味をととのえ、流し箱に入れて冷やし固める。
6 お好みで、生姜醤油、酢味噌、ぽん酢などをかけて食べる。

鯛めし（4人前）

鯛（小さいもの）　1匹
米　3カップ
水　3カップ
薄口醤油　大さじ3
酒　大さじ　1.5
塩　小さじ　1
昆布　5センチ角1枚

1 鯛はうろこと内臓をとり、軽く洗う。
2 米を洗って30分くらいうちあげておいてから、炊飯器に入れ、塩・醤油・酒を入れて水加減をする。
3 上に昆布、鯛を丸ごと入れ、炊く。（鯛は切り身でもよい）
4 ご飯が炊きあがったら、昆布と鯛を取りだし、鯛は別の皿で、箸で身をほぐして取り、もう一度身だけを炊飯器にもどす。
5 鯛の身とご飯をよく混ぜる。

レシピ協力
今治郷土料理普及協議会

Imabari Architecture

実は…
今治って
建築がアツいんです！

世界的な建築家・丹下健三氏とも縁が深く、今治市内にはいくつもの丹下建築が残る。他にも、伊東豊雄氏、隈研吾氏、原広司氏、谷尻誠氏など、今、最前線で活躍する有名建築家の手掛けた作品も多数あり、建築や設計に関心の高い人たちには興味深い町だ。

丹下健三氏の作品群

今治市公会堂（1958年）

今治市民会館（1965年）

今治地域地場産業振興センター
（1985年）

旧今治信用金庫本店（1960年）
（現 愛媛信用金庫今治支店）

旧今治信用金庫常盤町支店（1967年）
（現 愛媛信用金庫常盤町支店）

今治市庁舎本館（1958年）
今治市庁舎・第一別館（1972年）
第二別館（1994年）

巨匠建築家の作品を求めて

市庁舎本館と市民会館、公会堂の三棟は、都市設計も研究していた丹下氏らしく、駐車場を挟んでコの字型に配置されている。いずれもル・コルビュジエ建築からの影響を感じさせる作品といわれている。市庁舎別館は、先の三棟と比較すると近代的なデザイン。市庁舎の設計から二十七年後、七十三歳となった丹下氏が基本設計を行ったのが今治地域地場産業振興センターだ。年代による丹下建築の変化も見どころのひとつ。すべて徒歩圏内にあるので、市街地を散策しながら丹下建築巡りの一日を過ごしてみては。

丹下健三
Kenzo Tange
（1913〜2005）

大阪府生まれ。日本を代表する世界的な建築家、都市計画家。今治市は父親の故郷であり、小学校・旧制中学校時代を過ごした。主な建築物に、広島平和記念公園、香川県庁舎、国立代々木競技場、東京都庁舎など。

まだまだある！

有名建築家の作品

今、最前線で活躍する有名建築家が手掛けた作品も数多くある。今治は間近で建築作品と触れ合うことのできる絶好の場所だ。

亀老山展望台
建築家：隈研吾氏
大島（今治市吉海町）

今治市伊東豊雄建築ミュージアム
建築家：伊東豊雄氏
大三島（今治市大三島町）

今治市岩田健母と子のミュージアム
建築家：伊東豊雄氏
大三島（今治市大三島町）

眞鍋造機株式会社本社ビル
建築家：谷尻誠氏
今治市高部

みなと交流センター　はーばりー
建築家：原広司氏
今治市片原町

いまばり名建築

市内を車で走っていると思わず目を奪われる個性的な建築に出会うことがある。ここでは、今治市内にあるちょっとユニークな建築物をご紹介しよう。

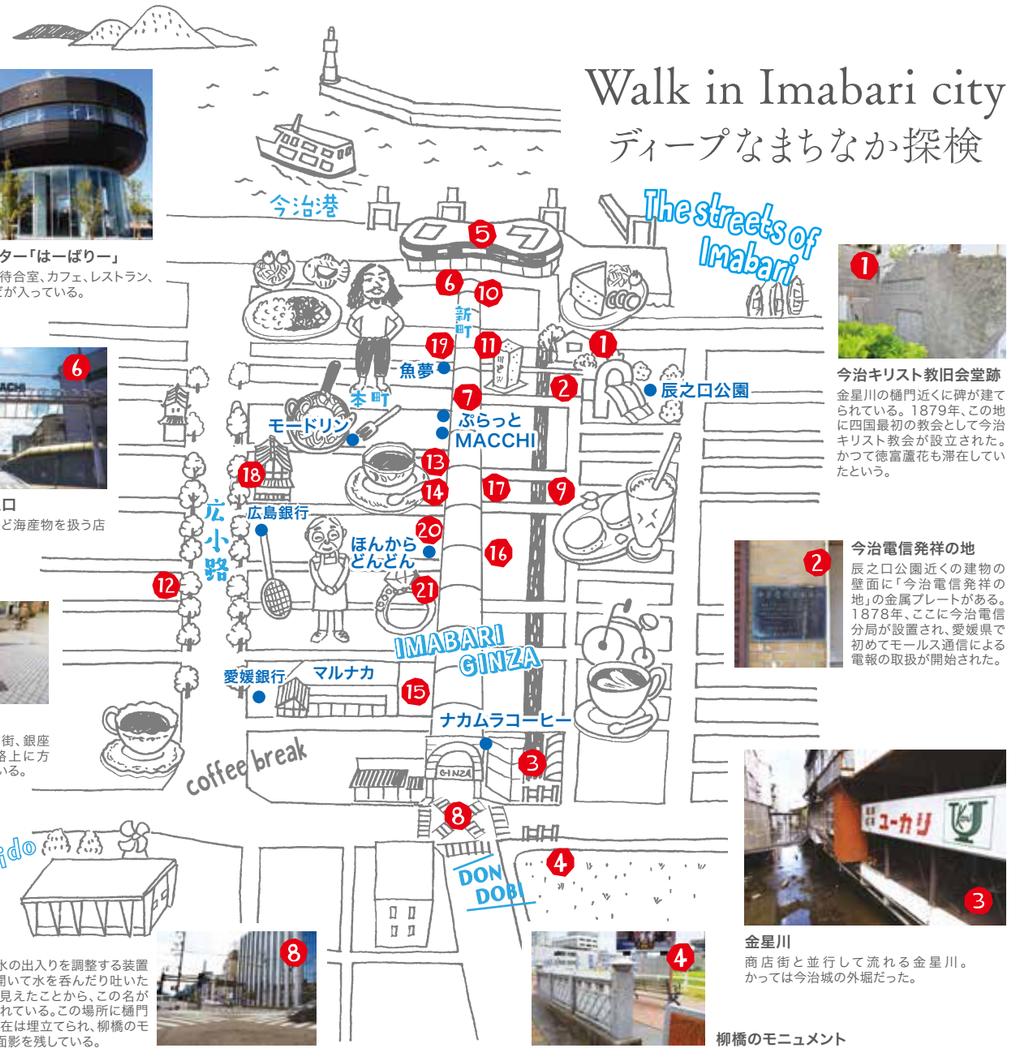
日本食研株式会社　KO宮殿工場
「世界一美しい工場」と評判の日本食研のＫＯ宮殿工場は、豪華絢爛、目を奪われる豪華さを誇る。オーストリアに実在するベルベデーレ宮殿をモチーフとして設計されている。

母恵夢本舗 本町本店
有名な銘菓店の屋上にはお城の天守閣のような建物が設置されている。昭和40年頃の写真にも同じように屋上にお城があった。

渦潮電機株式会社　みらい工場
今治を代表する船用工業の企業。未来の船舶をイメージしてデザインされたという工場は、まるでＳＦ映画のスペースシップのよう。

今治国際ホテル
今治のランドマークタワー。地上23階、高さ101.7m、四国で一番高いホテルで、市内のいたるところから見える。夜になると幻想的にライトアップされる。

Walk in Imabari city
ディープなまちなか探検



みなと交流センター「はーばりー」
船の切符売り場や待合室、カフェ、レストラン、企業のオフィスなどが入っている。

新町商店街の入口
鮮魚店や蒲鉾店など海産物を扱う店が多い新町エリア。

方位盤
本町筋と新町商店街、銀座商店街が交わる路上に方位盤が設定されている。

今治キリスト教旧会堂跡
金星川の樋門近くに碑が建てられている。1879年、この地に四国最初の教会として今治キリスト教会が設立された。かつて徳富蘆花も滞在していたという。

今治電信発祥の地
辰之口公園近くの建物の壁面に「今治電信発祥の地」の金属プレートがある。1878年、ここに今治電信分局が設置され、愛媛県で初めてモールス通信による電報の取扱が開始された。

金星川
商店街と並行して流れる金星川。かつては今治城の外堀だった。

呑吐樋（どんどび）
呑吐樋とは、水の出入りを調整する装置のこと。口を開いて水を呑んだり吐いたりするように見えたことから、この名がついたといわれている。この場所に樋門があったが現在は埋立てられ、柳橋のモニュメントが面影を残している。

柳橋のモニュメント

今治港とJR今治駅の間の一帯は、交通・市政・商業の要衝。陸と海の玄関口を擁し、様々な人が行き交う。今と昔が混在するどこか懐かしい街並みには人を惹きつける不思議な魅力がある。ゆっくり流れる時間に身をまかせ、ただぶらぶらと歩いてみるだけでもきっと楽しい。

港町の朝は早い

かつては大型フェリーが発着し賑わっていた今治港。老朽化した港湾ビルの建て替えにともない誕生した「はーばりー」は、巨大船のような迫力あるビジュアルだ。設計は原広司氏。港湾施設としての機能だけでなく、人々の交流の場として新しい役割を担っている。

はーばりーを背に、商店街に足を踏み入れる。ここは鮮魚店や蒲鉾店が軒を連ねる「新町」エリア。朝早くから働く人が集まるため、「早朝喫茶」という珍しい営業スタイルの喫茶店が存在する。かつては数軒が営業していたようだが、今は「マリン」と「ガーネット」の二軒のみ。漁師や市場で働く人たちに合わせ「マリン」のオープンは朝五時。アットホームな店内では、常連さんがトーストとサラダにゆで卵、コーヒーの定番モーニングを楽しんでいた。

今治商店街は、今治港からドンドビ交差点まで、全長約七百mの通りだが、厳密にいうと港側から「新町」「銀座」「どんどび」と三つの商店街に分かれている。呉服店が多い本町筋を挟んで山手が「銀座」。今治市まちなか活性化サロン「ぷらっと」の前がその基点だ。すっかり風景に溶け込んでいるが、「ぷらっと」前の路面には方位盤が設置されている。

アポニーでコーヒー
広小路沿いの2階にある老舗喫茶店。自家焙煎した豆でマスターが一杯一杯丁寧に淹れるコーヒーに根強いファンが多い。心地よい音楽と店内に漂うコーヒーの深く甘い香りが時を忘れさせてくれる。

不二家のホットケーキ
昭和レトロな純喫茶「不二家」。セルクルに流し込んで銅板で焼くホットケーキは、50年以上愛され続けてきたこの店の代名詞。

大人の隠れ家カフェ
コンクリートの階段を上がり扉を開けると、洗練された空間が広がる。商店街の一角にあるカフェ「ア・デュマン」は、日常の雑事から離れられる場所。

早朝喫茶
かつてはこの界隈に数軒あった早朝喫茶だが、今は2軒のみ。写真は現役の「早朝喫茶マリン」のモーニング。丁寧に盛り付けられたサラダに厚切りトーストとコーヒー。

銀座に、銀細工職人
銀座商店街の中にひっそりと佇む「しろかね舎」。鍛冶職人、徳丸さんが作るアクセサリーは、繊細さの中に力強さが宿り独特な魅力を放つ。

老舗の蒲鉾店
明治4年（1871年）創業の「魚貞」はこの地で長い歴史を持つ老舗の蒲鉾店。店頭には様々な種類の蒲鉾が並ぶ。

歩き疲れたら、コーヒーでひといき

商店街を歩いてみると、早朝喫茶もしかり、付近にはカフェや喫茶店が多い印象を受けた。はーばりーの一階には「コーヒースタンド・ターミナル01」、新町商店街には「チルチル」。銀座商店街にある「ア・デュマン」はアンティークの英国家具が並ぶオシャレな雰囲気。大人の隠れ家的カフェだ。路地に入ると「モードリン」。昭和レトロな喫茶店でモーニングやランチが人気。

金星川沿いにある創業五十年を超える純喫茶「不二家」、人気のホットケーキは、表面はカリッと中はふんわり。優しい甘さが懐かしくほっとする味だ。広小路沿いの二階にある「アポニー」も創業五十年の老舗珈琲店。自家焙煎豆をネルドリップで淹れた一杯は香り高くファンが多い。どんどび商店街の「A cup of…ナカムラコーヒー」は、二〇一六年にオープンしたカフェ。イタリア製のマシンで淹れるエスプレッソが人気だ。

他にも、新鮮魚介ランチとブラジル料理『ムケッカ』が人気の「Cafe warm 魚夢」や、コミュニティカフェ「MACCHI」など、ユニークで若い店主たちが頑張っている。昔ながらの店にイマドキの新しいカフェが新たに加わることで、商店街に新しい魅力が生まれている様子。

イツマデモ　ノコシタイ　DESIGN

どこかなつかしい
今治で見つけたお気に入りパッケージ

ラムリン

50年以上愛され続ける銘菓「ラムリン」。「ラムリン」の文字と馬車風イラストのパッケージがなんともレトロでかわいらしい。銀紙をひらくとラム酒とシロップがたっぷり染み込んだカステラ。食べる時に手がべちゃべちゃになるのがまたイイ。素朴で懐かしい味にこころもほどけていく。

くろふね菓舗　（今治市室屋町）

水軍みそ

波しぶきをイメージしたイラストに、オレンジ背景ブルーの「水軍みそ」の勇ましい文字。「ふるさとの味」のフォントが郷愁を誘う。味噌は、全国的には米みそが一般的だが愛媛では麦みそが主流。水軍みそも、麦みそ。水軍の荒々しいイメージとは裏腹に、ほんのり甘く体に染み渡るような優しい味はまさにふるさとの味。

水軍食品（今治市宮窪町）

モア

昭和レトロなパッケージの側面にはこんなポエムが。「エリーゼ　おまえがその花だった。ねえ、愛するものよ、いまのくちづけでおまえだということがわかった。どんな花の唇にも、こんな優しい愛情はない。どんな花の涙にも、こんなあつい情熱はない。」情熱的な包装紙をそっとほどくと、白あんが練り込まれたしっとり系スティックタイプのケーキが現れる。

モアヤマダ（今治市南宝来町）

ひしほ

えびす様のにっこりマークに、赤字でくっきり「ひしほ」。「ひしお」じゃなくて「ひしほ」。「ひしほ」は、愛媛の伝統的なお醤油で仕込んだおかずみそ。ご飯のお供に、野菜、お魚にお醤油替わりに、食卓には欠かせないアイテムだ。こちらも原材料は麦。やっぱり愛媛は麦みそ文化。

株式会社曽我増平商店（今治市末広町）

あららぎ
一位木

銀色の包み紙に印字された「一位木」の文字は、「あららぎ」と読む。名前の由来となった一位木は、その昔、笏（しゃく）を作ったことから位階の「一位」にちなむ。愛されるお菓子ナンバーワンの座を目指してその名前にしたという。

ムロヤ本店（今治市常盤町）

Information

今治スタイル　Vol.4

〈発行〉
今治市産業部営業戦略課
〒794-8511
愛媛県今治市別宮町１丁目4-1
TEL 0898-36-1554

〈企画/編集/印刷〉
第一印刷株式会社
〒799-1581
愛媛県今治市喜田村１丁目6-40
TEL 0898-48-8333

BACK NUMBER

Vol.1　2015年12月発行
遠いところようこそ
FC今治岡田武史氏インタビュー
Iターン、Uターン者
今治タオル佐藤可士和氏　ほか

Vol.2　2016年12月発行
産業編　モノづくりの原点は人である
造船産業/タオル産業/食品産業
観光産業/伝統産業/農業

Vol.3　2017年12月発行
ロケーション編
映画やドラマのロケ地を巡る
小説「天使は奇跡を希う」の舞台

お問い合わせ先　今治市産業部営業戦略課　TEL 0898-36-1554

創業120年　かねと食堂

創業は明治時代。店に入ると、おばちゃんが銭湯の番台のような台の上に座っていて、ここで注文してお金を払うシステム。入り口ののれんは2種類あり、季節に応じてかけかえられる。

おしゃれなミチコさん

完全オーダーメイドができる洋装店「テキスタイル・ウダカ」のミチコさんは、素敵なお洋服に笑顔のかわいい77歳。Instagramで、ファンの女性が投稿している「ミチコグラム」が大人気だが、ご本人は「インスタグラムって何グラム？（笑）」。

u.michikogram

顔出しパネル

「ササキ時計店」の前には、和装の新郎新婦の顔出しパネルがある。地元で活躍するイラストレーター沖野愛さんの作品。カップルはぜひチャレンジを。

「魚」オンパレード

魚のつく屋号が多い新町商店街。鮮魚店やかまぼこ店などが軒を連ねる。

商店街のシャッター

のれんを下した店も多くあるが、どこか懐かしいレトロな看板や、目を引くシャッターは健在。

100年の歴史をもつ金網店

「中山金網店」は手づくりで様々な金網の道具を作り続けている。本町、川岸端を経て今の場所に店を構えたのは明治時代のこと。創業100年を超える老舗の三代目店主は、笑顔の素敵なご主人。

白い壁に、パーマネント

商店街から路地に入るとまたレトロな魅力がある。もと美容院だった建物は白く塗られ、かつてのサインが陽光でうっすらと浮かび上がる。

ノスタルジックな商店街

商店街と並行して細い川が流れている。この金星川は、もとは今治城の外堀で、埋め立てられる前は川幅が三十mもあったという。川面にせり出すように建った家々や、洗濯ものがはためき、すっかり生活の一部になっている橋など、生活感溢れる眺めは必見。アジアの異国に迷いこんだような錯覚に陥る。金星川沿いは、ノスタルジックな風景と出会える、とっておきのスポットだ。

他にも今治商店街の魅力はいくつもあるが、店の看板もそのひとつ。文字のフォントやデザインもユニークで、時代を感じさせる。港と海に近い新町一帯には「魚」のつく屋号が多い。「魚研」「魚駒」「魚夢」「魚研」、向いは「魚貞」、魚オンパレードの看板に思わず見とれる。さすが港町。ドンドビ交差点に近づくと、今度は「どんどび」と名のつく屋号が目立つ。すでに閉店した店でも、軒下の看板は残されていることも多いため、年季の入った看板に昔を懐かしく思い出す人も多いかもしれない。

今と昔が混じり合う街の風景に癒される旅人は多いだろう。時間が止まったような、静かでのんびりとした商店街は不思議と居心地が良く、路地裏に寄り道、まわり道しながらを歩き回っていると、あっという間に時間が経ってしまう。歩き疲れたらお好きなお店で、コーヒーをどうぞ。